

八月末日。暦のうえでは「二百十日」にあたる、台風シーズンが間近にせまった晩夏。だが、私が物心ついた二十一世紀の日本では、この時期に入っても鋭く照り返しの強い日差しが降り注いでいる。特に金沢の町は昔から降水量が多く、暑さに加えて湿気もたらされるから、過ごしにくさが倍増する。晴れた青空は清々しくもあり、紫外線の降るお肌の天敵でもあり、私は相棒の日傘を片手に歩いている。

とはいっても、今日の私はそんな気候が気にならないくらいにウキウキしているのだ。道路沿いにある有名チェーンの蕎麦屋を通りすぎ、向かい側の直売所を視界の隅にとらえながら、逸る心を抑えて目的の場所を目指した。青緑色の野球ネットが見えたところで路地裏へ入る角を曲がると、高級住宅が立ち並ぶエリアに入る。誰もいない、まっぴろいグラウンドに沿って進んでいけば、次第ににぎやかな声や音楽が聞こえてくる。

あ、やってるやってる。

スクールカラーのオレンジ色のベストを着た PTA の方々に会釈して、アーチ状の校門の前に立った。純白とピンクの中間のような、やわらかな色合いの校門の上には「N 校祭」の横断幕が掲げられている。胸を大きく膨らませた私は、日傘を閉じて受付の生徒さんが座しているところまで大股で歩いた。学園祭二日目のせいもあってか、どことなく疲れた表情が浮かぶ男の子が、私にペンを渡して記名を求めてきた。こういうときは決まって、氏名を記入しながら視線が受付名簿の表面を彷徨って、知っている名前がないかと探してしまう。「やたら自分の名前を書くのに時間がかかっているな」という目で見られてしまったので、名前探しを中断してペンを素早く走らせ、「卒業生」の項目に丸で囲んだ。その途端、ふっと男の子の表情が緩んだ気がして、丁寧な手つきで学園祭のパンフレットを渡してくれた。

校門を潜ると、地域の人々が一か所に集中したのではないかと思えるくらいの群れのなかに巻き込まれた。そうそう、この密集さが心地よいんだよね。肩を叩き合っている男の子のペア、から揚げを片手に話している女の子どうしのグループ、同じ色のクラス T シャツを着た男女のカップル。もちろん、先生方もタオルを首に巻いて忙しそうに歩き回っている。三年生が担当する模擬店のテントでは、軒を並べてそれぞれのメニューを販売している。鉄板が油を弾いてジュージュウ鳴っている音、ラジカセから流れるアイドルの楽曲、着ぐるみ姿で「〇〇はいりませんか～」と売り文句を発する声。焼きそば、たい焼き、ホットドッグ。お腹の虫が騒ぎ出しそうな匂いにつられて、食券売り場を見ると、案の定長い列ができていた。仕方がないので、お昼ご飯は後にして校舎に入ることにした。

人の流れに身を任せて来客用の玄関でスリッパに履き替えた私は、突然の銃声に思わずびくっとしてしまった。でもご安心。銃声の正体は、一階の広い吹き抜け空間で繰り広げられる舞台パフォーマンスの演出なのだ。N 高校の特色である吹き抜け空間は「モナミ」と呼ばれていて、左右対称で「ロ」の字型に建てられた棟の空洞部分がそのまま多目的スペースとして利用できる構造になっている。左右の教室棟をつなぐように、リノリウム張りの渡り廊下が二階から四階までつながっており、それぞれの教室へ移動ができる。渡り廊下の表側には、全クラスのデザイン係が思い思いに描いた「クラス旗」が学年別に並んでいて、趣向を凝らしたレイアウトで自分たちのクラスを紹介している。天井部にはガラス張りの屋根が取り付けられて、太陽の光を乱反射させていた。この屋根は多少の雨露なら問題ないのだが、大雪になると、たちどころに隙間から吹雪いてきて一面が銀世界にな

ってしまう欠点がある。センター試験を目前に控えた高校三年の一月、大寒波の影響でどっと雪が積もり、生徒や教員こぞって渡り廊下と「モナミ」の床を雪かきしたことを思い出す。

N高校に帰ってきたんだな、という感慨が湧いてきて、赤色のトートバッグを握る手に力がこもる。十年前、私はこの一生徒として青春の時間を過ごした。そう、青春なのだ。どこか恥ずかしくて、くすぐったくて、時々ものすごく落ち込んで…。でも、いつも心臓の熱い動脈のうごめきを感じずにはいらなかった、幻のような日々。

「モナミ」のステージでは、二年生のあるクラスがダンスと劇を織り交ぜたパフォーマンスを繰り広げている。スリリングなメロディは「007」のメインテーマだろう。さっきまで、人気アイドルグループの最新作が流れていたはずだ。流行の曲と長く聴き継がれる曲とを躊躇なく組み合わせる、高校生ならではの感性。社会人になって数年を経た私は、今も当時もそんなセンスを持ち合わせていないなあと感じてしまった。スリッパが脱げないように慎重に階段を登った私は、段ボール箱を抱えながら駆け下りる一行に鉢合わせした。「ごめんささい！」と大慌てで去っていく男女の後ろ姿を見て、「怪我しないだね」と心の中でそっと念じる。

二階では主に文化部の発表用に各教室が当てがわれている。英語部によるレクリエーション、文芸部の古本市、写真部の作品展示、などなど。高校そばにあるパン屋さんも商品を販売しており、奮発して食パンと惣菜パン、おまけにビスケットを買ってしまった。このパン屋さんのネーミングに使われている花の名前は、別名「虞美人草」というのよね。「虞や虞や、汝をいかんせん…」と世界史の先生が授業中に唄ってくれたエピソードが懐かしい。隣の教室ではバザーが開かれて、目玉商品のジュースを提供している。せっかくだからと、他の生徒さんにくっついて並び、冷たいマンゴージュースをゲットした。

昼食を確保できた私は、一年生が担当する三階に足を延ばした。一年生は、教室の区画を利用して、お化け屋敷やアトラクション、立体迷路などのいわばアミューズメントパークを創り出す。夏休みの貴重な時間を費やして、必要な材料を調達したり、差し入れのお菓子を持ってきたりしたんだろうか。生憎、私は時間の都合で中に入って遊ぶことはできなかったけれど、懸命に「楽しさ」を提供しようとする生徒さんの姿が眩しかったし、教室の窓ガラスや廊下の太く丸い柱、座り心地の悪い木の椅子までもが、今の私にとっては懐かしく思えた。

階段を降りて一階に戻った。先ほどのクラスの発表は終わり、午前の部はひと段落したようだ。パンフレットを確かめると、午後から吹奏楽部の演奏が予定されている。それまで小一時間あるから、のんびりと食堂のテーブルでお昼を食べよう。図書室と保健室を通りすぎて一般向けにも公開された食堂の扉を潜ると、ここにも多くの生徒さんやPTAのみなさんがランチタイムを楽しんでいた。幸い、隅の方に空いている席があったので、邪魔にならないよう小さくなって腰を下ろし、パンとジュースを口にする。このパン屋の生地は、空気のようにやわらかくて、バターの香りがほどよく、つつい食べ過ぎてしまう。高校時代も帰り際に衝動買いして、親に見つからないよう隠れて食べていたものだ。

ストローでジュースを飲んで喉を潤していたとき、ふと視界の隅に赤いものが入り込んできた。薄くて平らな、赤く小さい下敷きのような物体。どうしてこれが、と思った刹那、私はパンを食べている最中なのにもかかわらず、それを拾っていた。間違いなし。大学受験のとき嫌になるほど使い尽くした、英単語帳の赤シートだ。赤文字で印字された単語をこのシートで隠しては確認し、隠しては暗唱し、を繰り返して、キャパシティの小さな脳みそを英単語でぎゅうぎゅう詰めにしたものだった。

どこから舞い込んできたのだろう。およそ学園祭とは縁遠いはずの赤シート。その虜になってしまった私は、周囲の生徒さんの様子を注意深く観察した。談笑する生徒さんばかりがいて思っていたけれど、私の席の近くにある一画、背の低い仕切りで区切られた、四角い机と長椅子がある小休憩スペースとでも言い得るような空間に、一人の男の子が座っている。その手は止まることなく英単語帳をめくっていて、ページの上段から下段、読み終わったら次のページへと、せわしなく首を動かしている。

学園祭くらい遊んだらいいじゃないの、とか、勉強ばかりしていてもつまらないわよ、とか、文句や怒りが起こってきてもおかしくない光景なんだろう。だが、私はただその場で体が硬直してしまって、思考が停止して、彼に対する悪感情を感じなかった。それほどに似ていたのだ。十年前、まさにこの食堂で、私は同じように赤シートを拾ったのだ。

彼の名前はKと言った。高校一年のときに同じクラスだったが、普段はおとなしく、あまり他者と交わっている様子はなかった。ただ、授業で先生がKのことを褒めたり、偶然近くにいたクラスメイトが彼のテストの点数を知って驚いていたりしたので、学業成績の優れた生徒なんだということは分かっていた。艶のある短い黒髪、少し汚れた白いブラウス。胸ポケットに刺さった三色ボールペンと、いつも持参している英単語帳。いわゆる優等生でガリ勉くんなんだろうけれど、友達にはならないだろうな、というのが第一印象だった。

ある日の放課後、当時入っていたグループの友達つきあいに疲れを感じて、私は食堂に迷い込んだ。部活動をしていなかった私は、他の生徒さんが部活や帰宅の時間になれば、ここが人気の少ない空白地帯になることを知っていた。だから、一人の時間が欲しくてたまらなくなったときの逃げ場として、ふらり立寄ることがままあった。別に、グループの友達に嫌悪感を抱いていたわけでは決してなかったし、ファッションやアイドルの話は刺激になった。でも、どこか「ずれている」感覚を拭い去れないままだったのだ。「〇〇の顔がイケメンだよ」という話で周囲が盛り上がりつつも、「見た目なんてどうとでも繕えるじゃない」と冷めた目で見ている自分がいた。「昨日、弟がむかつくことをしてさ」という話にも、「一方的に身内の悪口を陰で言っているの？」と辟易している自分がいた。もちろん、そんな感情は一言も口に出してはいなかったけれども。秩序を乱さないよう相手と呼吸を合わせて、何重もの思考フィルターを介してから思ったことを口にする。これが、当時の私ができる最善の友人関係だった。無事に相手と「さようなら」を交わした後に、どっと疲れがのしかかって、私は食堂の扉を潜っていた。

「あの、これは君のもの？」

単語帳を凝視している彼に向かって、私は思い切って赤シートを差し出した。始めにびくっと肩を持ち上げた彼は、眼鏡越しにまじまじと見つめて、

「はい、そうです。ありがとうございます」

とそっけなく言った。

Kも、そうだったな。

十年前、同じように足元に落ちていた赤シートを拾ったとき、単語帳をめくっていたKは今の彼よりもぶっきらぼうな返事をした。せっかく拾ってあげたのに、と勝手な怒りを感じた私だったが、大人の対応をしてやる

うと特に追求せず、食堂を去ろうとした。一人の時間を求めてきたのに先客がいたのでは意味がない。近くの本屋にでも立寄って気持ちの切り替えをしようと、踵を返そうとした矢先だった。

『君、ミステリが好きなの？』

一瞬、誰の台詞か分からなかった。その場にいるのはKただ一人なのだから、彼の声なのは疑いようのない事実なのに、私は雷に打たれたような衝撃を感じた。だから思わず、言わなくてもいいようなことまで聞いてしまった。

『どうして知ってるの？ みんなからバレないようにしているのに』

言わなければよかった、という後悔をしても後の祭りだった。私の歪んだ表情を見て取ったのか、Kは初めて私に向かって笑顔を見せた。

『簡単な推理だよ、ワトソンくん。君の引き出しにクリスティの文庫本が入っていたのを、掃除のときに偶然見つけたからさ』

Kの格好つけた物言いと、レディの引き出しを覗き見られたことに対して私は殺意を感じてしまった。でも彼の次の言葉に、振り上げようとした腕は力なくだらんと垂れてしまった。

『ミステリが好きって、良いね』

今まで、友達にはグループのリーダー格の子が好きだった恋愛小説が好きだ、という説明にしていた。間違っても、血みどろの殺人事件を繰り返す英米のミステリが好きだとは言えなかった。でも私の「好き」が英米のミステリであることも紛れもない真実だった。だから誰かに見られてしまう危険を冒しながら、お守り代わりに引き出しにクリスティの『そして誰もいなくなった』をしまっていたのだ。私が人知れず護ってきた聖域に、いとも簡単に土足で上がり込んできたKという人物に、私はかえって開き直ってしまったのかもしれない。

「ごちそうさま」

パンを食べ終えた私は両手を合わせて、こちらに気がつかないよう彼を眺めた。単語帳をめくる手はまだ止まらない。この子、痩せているけれど、お昼ご飯をしっかりと食べたのだろうか。彼を気遣うような人が周りにいないけれど、友達はあるのだろうか。他人の事情を気にしても始まらないのに、私は彼から目を逸らせずにいた。誰もが浮足立つN校祭の雰囲気なかで、独り己の世界を頑なに護っている彼に話したくなった。ああ、またデジャヴを感じる。Kと言葉を交わした日から、私はおかしくなってしまったのだけ。

授業でKが先生に指名されて立ち上がるたび、彼の動きが気になって仕方がなくなった。窓際の最後列に座っていた私は、対角線上の席に座る彼の横顔をノートの際にこっそりスケッチした。それまで関わっていたグループの子たちから、理由をつけて意識的に距離を取るようになった。もしグループの子が彼と二、三の会話をしようものなら、むらむらとした炎が燃え上がるのを抑えられなくなった。私が私でない気がして、自分の情動が信じられなくて、放課後は独り途方に暮れながら重たいエナメルバッグを担いで帰りのバス停に向かった。

だが、私は自分からKに話しかける勇気をもてずにいた。核家族の一人っ子として育てられたこともあり、身近な異性が父親だけだったという理由もあった。まして、何の話題から始めればいいのか見当がつかなかった。毎日の放課後を食堂のスペースで過ごしている、という事実だけ分かっていたから、金沢で初雪が積もった十二月上旬、私は意を決して食堂へ向かった。

「ねえ、突然ごめんね。ちょっといいかな」

私は単語帳を読みふける彼に向かって声をかける。くりくりの眼をした彼の顔は幼さが残っていて、「何？」と苛立ちとも興味とも取れる表情をしていた。腰に両手を回した私は、身を屈めるようにして彼に問うた。

『どうしてあなたはここで勉強しているの？』

十年前、そう K に言い放った私の姿は、彼にはどんな風に映ったのだろうか。「哑然」「呆然」と表現するほかない反応をみせた彼を見て、大失敗をしてしまったと感じた。まだ僅かな言葉しか交わしていない相手に、なんて突っ込んだ質問を投げかけてしまったのだろうか。せっかく出会えた稀有な存在を、自分の落ち度で手放すなんて、どこまで私は愚かなんだろう。ジ・エンド。映画の世界ならここで終了だ。居たたまれなくなって顔が紅潮して、「ごめん。気にしないで」と捨て台詞を残しバス停に向かおうとした。

『夢があるからだよ』

彼は人の動きを封じる魔法を知っているのだろうか。そう思ってしまうほど、彼の唱える言葉は重く、平易で、心臓の動脈を停止させた。夢という単語を聞いたのは何年ぶりだったろうか。ナポレオンの辞書に不可能という単語が無いのと同じように、私の辞書から夢という単語は抹消されていた。頭の悪い私には多すぎる予習や、週末の宿題、疲れる人間関係に揉まれるなかで、いつしか意識しなくなっていた儂いものだった。それを平然と言ってのけた彼に、私は素直に敗北を認めた。

『夢、叶うといいね』

それだけ言うのが精いっぱいだった。「サンキュー」の音が聞こえた気がしたけれど、夢中で玄関を目指した。心の底から負けたと思った。個人的な儂い恋は成就しなくていいと思った。私は彼と並んで手をつなぐだけの資格はないと悟った。それだけ彼は美しかった。私は醜かった。ぼろぼろとこぼれ落ちていく雫を手で払って、べちゃべちゃの雪道で足首を濡らしながら走った。ちょうどやってきたバスに乗ったけれど、うまく電子マネーの機械にタッチできなくて、運転手さんに迷惑をかけてしまった。

目の前の男の子は、大きな罪でも告白するように語ってくれた。

「分からないんだ。分からないけれど、N校祭が楽しくないと思うから、勉強してるんだ。僕にはこれしか出来ないから」

「そうなの」

学園祭のときも楽しめない人はいる。いや、学園祭だけじゃなくて、普段の休み時間や、クリスマスやお正月すら楽しめない人がいる。大学を卒業して、社会人になった今、そのことがくっきりとした輪郭をもって私の前に立ち現れている。でもそれは決して人生の負けではないことも、私は知っている。私がそうだったから。家族や友人に囲まれていたはずの私は「ずれている」感覚を抱き続けて、絶え間ない空隙を埋めようと必死にもがいていた。楽しいはずのN校祭も、Kと出会う前の始めの年は、グループの子に合わせて行動していたから全く楽しくはなかった。君も、もがいているんだね。答えを見つけようとしているんだね。私は一歩近づいて、彼の耳元で囁くことにした。

「大丈夫。答えはきっと見つかるわ。旧い友達に、似たような子がいたから。一つ、言ってあげられることといえば…そうね。肩に力を入れ過ぎないで、ちゃんにご飯を食べてね、ってことくらいかな」

差し出したパン屋さんのビスケットを、彼は黙って受け取って、お礼を言った。吹奏楽部が『展覧会の絵』の演奏を始めた。彼は突然立ち上がると、

「僕、この曲が好きなんで、失礼します」

と言うと、食堂を出て「モナミ」の舞台に走った。

よかった。彼には彼の世界があった。良い年をしたアラサーが心配することなんてなかったわ。ちょっと反省して、私は群集をかき分けて玄関を出て、校舎の門を潜った。そうだ、あの日から校門の出で立ちが違って見えたのだけ。私の「好き」を認めてくれたKのお陰で、少しずつ私は変わることができた。ミステリに夢中になりすぎて、相変わらず成績は悪く、よく親に叱られてはいたのだけれど。

Kに対する想いは、時間をかけてゆっくりと鎮まり、沈滞していった。けれども悲しくはなかった。何事もなかったように軽く挨拶してくれるだけで嬉しかったし、彼が他のクラスメイトに馴染んでいくのを穏やかに眺めることができた。独りだった彼も、N高校という環境のなかで変わろうとしていたのかもしれない。二年生で文理が分かれて疎遠になってしまった後も、彼の存在を恋とは別の気持ちで胸に遺したまま、私は私なりの高校時代を過ごすことが出来た。

青空に積雲がぽっかり浮かんでいた。今日食べたパンに似ていて、私は日傘越しに笑みを浮かべた。やっぱり来てみて正解だった。私のパートナーに今日の出来事を話してみよう。彼ならなんて答えるだろうか。左手の指輪の感触を味わいながら、てくてくと家路に着いた。野分の風が、心地よく頬の表面を撫でていった。

Kに向かって、ありがとう。私に夢を与えてくれて。

N高校に、ありがとう。私に力を与えてくれて。



Photo by [tomekantyou1](#)